

第5章

体幹部の皮膚疾患

帯状疱疹 [纏腰火丹] herpes zoster

病名解説

纏腰火丹^{てんようかたん}の病名は『証治準繩』瘍科篇に由来する。別名を甌帯瘡^{おうたいそう}・蛇串瘡^{じやかん}・蛇纏瘡^{じやかん}・蛇丹^{じやかん}・火腰帶毒^{かようたいどく}・火帯瘡^{かたいそう}・白蛇串^{しやくじやかん}という。俗称に纏腰竜がある。許履和は顔面に発したものを蛇丹^{じやかん}、肋腰部に発したものを纏腰火丹^{てんようかたん}（または蛇箍瘡^{じやかん}）としている。本病は胸腰部に集簇性に出現する疱疹と、それに伴う激痛を臨床上の特徴とし、現代医学の帯状疱疹に相当する。

現代医学の概念

小児期に罹患した水痘の帯状疱疹ウイルスが再活性化したものである。必ず身体の半側に、デルマトームに沿って皮膚・粘膜上に発症する。末梢神経の走行部位に、紅斑を伴った小水疱が带状に出現し、神経痛様疼痛を伴う。びらん・膿疱を生じるが、2～3週間で乾燥性の痂皮となり治癒する。高齢者では、治癒後も神経痛が消退せず慢性化・難治化することがあり、帯状疱疹後神経痛と呼ばれる。また、まれに顔面神経麻痺や角膜障害などの眼病変を合併することがある。

高齢者はもちろん、青壮年でも衰弱状態の者や白血病あるいは悪性腫瘍の患者など免疫不全の状態の者にみられる。

病因病機

湿熱内蘊が内因、毒邪感受が外因をなすが、本病における特徴である。

1. 湿毒鬱滞（湿毒）

湿は脾の運化作用の失調により生じるもので、内湿が皮膚に外発して水液が肌表に聚まると、真珠のような水疱となって発現する。『医宗金鑑』外科心法要訣篇では「蛇串瘡、……湿によるものは黄白色で、大きさが不揃いな水疱を生じ、びらんを呈して滲出液が生じる。乾燥するものの多くは痛みがある。これらは脾肺二経の湿熱であるから治療としては、除湿胃苓湯を用いるのが宜しい」と述べている。

2. 火毒熾滞（火毒）

熱は心肝の気の鬱滞により生じ熱鬱が長くなると火と化し、皮膚に壅滞した火熱が経絡をめぐり行く。経絡が阻滞して不通になると紅斑・漿液性丘疹（丘疱疹）・激痛などの症状が次々と発現する。『医宗金鑑』外科心法要訣篇では「蛇串瘡は、……乾燥した者では紅赤色で雲の欠片のような形をしている。風粟〔粟をまいたような皮疹〕を生じ、痒くなったり発熱したりする。これは肝心二経の風火によるもので、治療には竜胆瀉肝湯が宜しい」と述べている。

3. 氣滞血瘀（瘀滞）

余毒未尽のため経絡が疏通性を失うと、氣滯血瘀を引き起こす。経氣が宜発できないので持

続性の疼痛や刺痛〔刺されるような痛み〕を生じる。

弁証施治

内服療法

1. 湿熱搏結証

患部は淡紅色で水疱が集簇性に発現し、水疱液は混濁し潰れて滲出液をみる。びらんするものもある。疼痛・食欲不振・腹脹などを伴う。

〔舌質〕淡紅 〔苔〕白膩あるいは黄膩

〔脈〕滑数

〔治法〕清化湿熱・涼血解毒

〔方剤〕薏仁赤豆湯加減

生薏苡仁・赤小豆各 15 g, 茯苓皮・金銀花・地膚子・生地黃各 12 g, 車前子・車前草・赤芍・馬齒莧各 10 g, 甘草 6 g, 藿香・佩蘭各 9 g

2. 毒熱熾盛証

皮膚は鮮紅色で、丘疹・漿液性丘疹（丘疱疹）がみられ、水疱壁は緊張し集簇性または帯状に並んで分布する。灼熱感・刺痛感があり、不眠となることもある。咽乾口苦・濃黄色の尿（量少）・便秘などの症状を伴う。

〔舌質〕紅 〔苔〕黄あるいは乾黄 〔脈〕弦数

〔治法〕清熱瀉火・解毒止痛

〔方剤〕大青連翹湯加減

大青葉・玄參・貫衆・黄芩各 9 g, 連翹・金銀花・生地黃各 12 g, 馬齒莧 12～15 g, 炒牡丹皮・赤芍各 6 g, 綠豆衣 15～30 g

3. 氣滯血瘀証

高齢者に多い。疱疹消退後も痛みは治まらず、不眠となる。食欲不振・心煩などを伴う。

〔舌質〕紅あるいは暗紅

〔苔〕少苔あるいは薄白 〔脈〕細洪

〔治法〕舒肝理氣・通絡止痛

〔方剤〕金鈴子散加減

金鈴子¹⁾・鬱金・紫草根各 9 g, 玄胡索 6～9 g, 酢柴胡・青皮各 6 g, 炒白芍・当帰各 12 g, 酢絲瓜絡 10 g

〔加減方〕

- 高熱持続：羚羊角・綠豆衣・金銀花炭・生地黃炭
- 口苦・咽頭乾燥・濃黄色尿（量少）：焦山梔子・炒竜胆草・麥門冬・桔梗
- 大便秘結：炒枳殼・酒大黃（後下）・桔梗
- 顔面部の皮疹：杭菊花・桑葉・野菊花
- 眼角に接近するもの：谷精珠*・炒黃連・密蒙花*
- びらんして滲出液をみるもの：六一散（蓮葉にて包煎）・生地榆・蒼耳子
- 腹脹便澇：大腹皮・炒枳殼・広木香
- 食欲不振：神麴・炒麦芽
- 眩暈：茺蔚子・蔓荊子・川芎
- 疼痛：金頭蜈蚣・全蝎
- 下肢の皮疹：川牛膝・宣木瓜²⁾
- 腰仙部の皮疹：炒杜仲・続断
- びらんして収斂しないもの：黄耆・白藜・党参・山藥

外用療法

1. 疱疹が自潰していない場合は、玉露膏あるいは雄黄 10 g, 冰片 1 g の粉末に冷水を加えたものを塗る。
2. 丘疹・漿液性丘疹で水疱の自潰をみない場合は、鮮芦薈を潰して梅肉を少量加えたもの、あるいは双柏散・金黃散・二味拔毒散などを患部に外敷する。
3. 皮膚が破潰して滲出液が多いときには、ま

1) 金鈴子：川楝子の別名。他に苦楝子・練実・棟実・川力・仁棗などがある。

2) 宣木瓜：木瓜の別名。陳木瓜・皺皮木瓜。バラ科 Rosaceae ボケ *Chaenomeles lagenaria* Koidz. の成熟果実。台湾・大陸南部では木瓜はパパイア *Carica papaya* を指し、生薬名は蜜木瓜とされている。日本産で流通するものはカリン *Chaenomeles sinensis* Koehn. の熟成果実で、中国では光皮木瓜の名称で市場に出回るものである。また日本特産のクサボケ *Chaenomeles japonica* は和木瓜と称される。

ず馬齒莧・黄連・黄柏・五倍子などの清熱・除湿・解毒類の中薬の煎汁を湿敷する。滲出液が減少あるいは乾燥した後は、氷石散や黄連膏を敷貼し、結痂が収斂するまで行う。

4. 皮膚の神経痛があるときには、黒色拔膏を包帯などで圧迫固定して2～3日に1回交換する。

針灸療法

1. 毫針法

①循経取穴

[主穴] 曲池・身柱・陽陵泉・三陰交

[配穴]

- 皮疹が目の周囲にある場合：太陽・頭維・陽白
- 頬骨周辺にある場合：四白・睛明・下関
- 下顎部位にある場合：頰車・地倉・大迎
- 腋窩にある場合：肩貞・極泉
- 上半身にある場合：合谷
- 下半身にある場合：足三里

[方法] 青年には瀉法を行い、高齢者や虚弱体質者には補法を行う。2日に1回、10回1クールとする。

②局部取穴

[取穴] 阿是穴（皮疹部）

[方法] 30～32号の毫針を用い、阿是穴の上下左右異なった4カ所から針を15～30°の角度で斜刺し、得気の後30分置針する。その間軽く3～5回捻針する。1日1回、10回を1クールとする。

③弁証取穴

[主穴] 肝兪・曲池・支溝・阿是穴（皮疹部）

[配穴]

- 風火証：期門・曲泉・足竅陰
- 湿熱証：内庭・外関・俠溪
- 熱盛証：合谷・陽陵泉・神門

[方法] 瀉法。2日に1回、10回1クールとする。

2. 灸法

①囲灸法

[取穴] 阿是穴（皮疹部）・心兪・肝兪

[方法] 皮膚一面が発赤する程度に、30～40分棒灸で施灸する。1日1回。

②棉花灸

[取穴] 皮疹部位

[方法] 脱脂綿で病変部全体を覆い、脱脂綿の一端を燃焼させる。1日1回。

③弁証灸

[主穴] 阿是穴（皮疹部）

[配穴]

- 風熱証：心兪・肺兪
- 湿熱証：肝兪・脾兪

[方法] 皮膚一面が紅色になるまで棒灸を行う。気持ちがよく、痛みを感じない程度とする。1日1回（重症者には1日2～3回）、5回を1クールとする。

④経験穴灸

蜘蛛穴：督脈上にある。患者を姿勢を正して座らせ、頭の最大周囲長の糸を作る。その糸を頸部前方から頸部を一周させ、糸の両端を合わせたら、背部正中線上に密着するように垂らし、その糸の両端の先に取り穴する。

[方法] 穴上に直接灸を1～3壮施灸する。1日1回、1クール3回とする。

その他の療法

1. 耳針法

[主穴] 肺・腎上腺、皮疹相応部位

[配穴] 神門・内分泌・交感・枕・蕁麻疹区・肝・脾

[方法] 刺針して得気の後置針30分、2日に1回、7回を1クールとする。

2. 頭皮針法

[取穴] 感覚区・運動区

[方法] 皮疹が左側の場合は右に、右側の場合は左に取り穴する。

皮疹が臍より上の場合、取穴部位の下3/5に刺針する。

皮疹が臍より下の場合、取穴部位の上2/

5に刺針する。

刺針して得気の後、30～45分置針、その間5～10回捻針する。1日1回、10回を1クールとする。

3. 穴位レーザー法

[耳穴] 肝・胆・神門

[方法] ガリウム砒素半導体レーザー器で、各穴に5分照射する。1日1回、7回1クールとする。

4. 梅花針法

[取穴] 阿是穴（皮疹部）

[方法] 梅花針で局所に強刺激を与え、疱疹を破裂させ、わずかに出血させる。陰圧（火罐）で局所に残った滲出液や血液を除き、消毒後に紫金錠を塗布し、滅菌ガーゼで覆う。2日に1回、3回を1クールとする。

経験方

1. 馬齒莧合剤 馬齒莧60g、大青葉・当帰各15gを煎じて服用する。
2. 全蝎30gを細かく粉末状にして、1日2回、1回3gを温かい白湯で服用する。神経痛後遺症に適用する。
3. 竜胆草30g、丹参15g、川芎10gを煎じて服用。
4. 全栝楼30g、紅花10g、生甘草6gを煎じて服用する。
5. 鮮馬齒莧・野菊花各30g、あるいは鮮羊蹄草で洗浄する。桑螵蛸を適量（軽く火で炙って焦がしたもの）、あるいは赤小豆・滑石粉各30g、あるいは蛇床子（焙乾）、あるいは冰片10～20gを植物油やワセリンと混ぜ合わせて糊状にし、患部に外敷する。1日2～3回。
6. 柿^{しし}*汁、あるいは苧^{ちよまこん}麻根*を煎じて濃縮したものを、患部に塗布する。1日3～4回。
7. 側柏葉・黄柏・蕁地蚯蚓類・生大黃各15g、赤小豆・雄黄・輕粉各10gを粉末にし、冷水あるいは香油で混ぜ合わせたものを外搽する。

症例 1

[患者] 李××、60歳、女性。

[初診] 1983年9月19日

[症状] 1週間前より右胸肋部に漿液性丘疹があり、疼痛があった。

[所見] 右側肋下および乳房下に2片の桃核大の皮疹があり、その中には緑豆大の大きな水疱が集簇していた。水疱壁は緊張しており、周囲に紅暈をみた。

[舌質] 紅 [苔] 黄 [脈] 弦滑

[弁証] 毒熱が皮膚に搏結した。

[治法] 清熱解毒・佐として鎮痛安神

[方剤] 馬齒莧解毒湯

馬齒莧30g、大青葉・敗醬草・紫草各15g、黄連10g、酸棗仁15g、煅竜骨・煅牡蛎各30g（先煎）、党参10g、全蝎6g（分服）

[外用] 四黄膏を患部に塗布する。1日2回。

[経過] 9月26日に再診。水疱液は基本的には消失し、結痂が出現して疼痛は明らかに減少した。治療は前方を適用。

10月4日再診。皮疹はすべて消失し治癒した。（『北京中医学院学报』4：15，1985）

症例 2

[患者] 張××、31歳、男性。

[症状] 右上腹部に2つの群に集簇した米粒大の丘疹がみられる。神経に沿って帯状の配列をみた。灼熱感・刺痛感があり、局所は着衣時にも激痛を感じるほど敏感になっていた。帯状疱疹と診断した。

[主穴] 阿是穴（皮疹部の穴）

病変部位の周囲に三稜針で3～5針の挑針を皮膚が破裂し少量出血をみる程度に行う。その後棒灸を15～30分行う。

[配穴] 陽陵泉に捻針を行う。

[経過] 1日1回の治療で、3回で症状は消失した。（『針灸臨床集験』）

名論摘要

『外科啓玄』

「この瘡は皮膚に生じ、水窠瘡に似る。淡紅色で疼痛があり、五七個が集簇し、見えたり見えなかつたりする。苧麻を瘡の上で揉み、擦って

汁をかけることもあるが、苧麻の焼いた灰を粉末状にして瘡の上に外搽すると治癒する」

『外科大成』

「俗名を蛇串瘡という。腰に赤紫色の発疹あるいは水疱を生じて、火がついたように痛む」



丘疹性蕁麻疹 [水疥] papular urticaria

病名解説

水疥すいかいの病名は『諸病源候論』に由来し、「水疥は、小さな瘰癧のような瘡癩はいらいで、摘み破ると漿液が出てくる」との記載がある。後世の医学書では皮疹の形態の違いにより、多種多様の名称を使用しており、水丹・風丹・細皮風疹・膿窠疥などがよくみられる。例えば原発疹が虫刺されのようなものを細皮風疹と称し、皮膚病変の頂上に小さな水疱が出現するものを水丹という。水疱を掻き破り毒邪に感染して化膿したものは膿窠疥に近い。また『諸病源候論』土風瘡候では、「土風瘡・風疹のような形状で頭部は破れ、再発を繰り返す。これは肌腠虚疏となったために風塵が皮膚に入ったものである」と述べている。以上の文献は、本病の臨床における特徴を異なった角度から描写したものであり、現代医学における丘疹性蕁麻疹に類似する。

現代医学の概念

児童に多くみられ、夏秋に好発する。腰部・臀部・体幹・四肢に生じる。皮疹初期は落花生大で、楕円形の紅色浸潤性膨疹（風団）であり、中央部には丘疹または水疱を有する。皮疹数は不定で散在する。引っ掻くことによって感染化膿したり結痂を生じたりする。痒痒感がある。

病因病機

肌膚に滞蘊した胎中遺熱〔胎児の時期から有している熱〕に、風熱の感受が加わって、内外の両邪が互結相合する。また湿熱内蘊の状態、蚊・ノミ・ダニなどといった虫に刺されて毒汁を受けると、湿熱と毒汁が肌膚上で交阻〔互結〕する。また稟性不耐に加えて、魚介類などの風を生じやすい食物を摂取すると、脾胃の運化が失調するため湿熱が肌膚に鬱阻して発症する。

弁証施治

内服療法

1. 風熱搏結証

大小さまざまな浸潤性風団〔紅色の膨疹〕が上半身に散在し、中心部に丘疹〔漿液性丘疹〕や水疱をみることもある。主に集簇性に出現し、凹凸不整で痒痒を伴う。

〔舌質〕紅 〔苔〕薄紅 〔脈〕数

〔治法〕疏風清熱止痒

〔方劑〕銀翹散加減

金銀花・連翹各 10 g, 蟬退・炒牛蒡子各 4.5 g, 荊芥・防風各 6 g, 黄芩・牡丹皮各 3 g

2. 湿熱鬱結証

中心部に水疱を有する浸潤性風団が生じ、引っ掻くと滲出液が生じる。大型水疱・血性水

疱がみられることもある。潰れて湿潤・びらんする。多くは下半身に散在し、癢痒を伴う。

[舌質] 紅 [苔] 紅膩 [脈] 滑数

[治法] 清熱祛湿・疏風止痒

[方剂] 枳朮赤豆湯加減

炒白朮・炒枳殼・蟬退・赤芍・防風各 6 g,
茯苓皮・赤小豆各 12 g, 荊芥 3 g, 砂仁
4.5 g (後下), 益母草 10 g

[加減法]

- 激しい癢痒^{びやくしつり}：白蒺藜³⁾・白鮮皮・蒼耳子・地膚子
- 大型水疱や血性水疱：牡丹皮・紫草・木通・車前子
- びらん・滲出液：生地榆・馬齒莧・赤石脂
- 胃腸の寄生虫により誘発：苦楝子・使君子
- 化膿：紫草・紫花地丁・蒲公英・敗醬草・綠豆衣
- 魚介類による食中毒：蘇葉・焦三仙（焦山楂子・焦麦芽・焦神麴）・胡黃連

外用療法

1. 丘疹，丘疱疹が主なときは，百部チンキ・九華粉洗剤を使う。
2. 疱疹の破裂・びらん形成がみられるときは，馬齒莧・生地榆等分を煎じたものを湿敷する。1回 15～30分，1日 2回。
3. 皮疹の化膿があるときは，地虎散と植物性油を混ぜ，糊状にしたものを患部に塗布する。1日 1～2回。

経験方

1. 路路通 30 g，蒼耳子・百部各 15 g を煎じたもので患部を洗う。1日 2～4回。
2. 癢痒が激しいものは，川椒 10 g，野菊花・

苦参各 15 g を煎じたもので外部を洗う。1日 2～3回。

3. 癢痒と水疱，湿潤があるものは，路路通・蒼朮各 60 g，百部・艾葉・枯帆各 15 g を煎じ局所を洗う。1日 3～4回。
4. 小児の場合，市販の牛黄清熱散を服用する。毎回成人量の 1/3 から 1/2，1日 2～3回。

症例

[患者] 陳××，8歳，女兒。

1週間前より腰部・大腿部・前腕部に紡錘状の風団が散在性に発現した。瘡の頭頂部には粟粒大・米粒大の漿液性丘疹がみられた。徐々に数が増加し，ひどい癢痒があった。

[弁証] 脾胃虚弱・風邪外襲

[治法] 扶脾化湿・疏風散邪

[方剂] 枳朮赤豆飲

炒枳殼・土炒白朮⁴⁾・蟬退・防風・赤芍各 6 g,
赤小豆 12 g, 茯苓皮 15 g, 荊芥 3 g, 益母
草 10 g, 砂仁 4.5 g (後下)

上方を服用して2日後に癢痒感は軽減し，皮疹は治まった。さらに3剤服用して治癒した。

(『中国当代名医經驗方全集』徐宜厚案)

名論摘要

『瘍科会粹』

「疥癬とは，脾経湿熱と肺気風毒が肌膚^{やど}に客ることによって生じたものである。風毒が浅く浮いたものは疥となり，風毒の深く沈んだものは癬となる。……三日で漿液を含む水疥を生じ，自潰すると滲出液を生じる」

『許履和外科医案医話集』

「本症は，先天的体質により，血分に熱があり，風邪外襲が加わったために，血熱が肌膚に

3) 白蒺藜：蒺藜子の別名。他に刺蒺藜・硬蒺藜・蒺梨・七厘・次七力子・吉蒺・杜蒺梨・野菱角・地菱・蒺骨子・白蒺藜子・藜・旁通・屈人・止行・杜蒺藜・三角刺・八角刺などがある。

4) 土炒白朮：まず伏竜肝を鍋で炒めて，それに白朮片を加えて，さらに表面が土色になるまで炒める。その後，表面の余分の土泥を取り去って冷えたものを土炒白朮と称する。白朮 100 g に伏竜肝 20 g の割合でまぶす。益気補脾・燥湿和中・安胎などの薬効がある。

鬱滞したものである。牛蒡子・薄荷・荊芥・蟬退・蒼耳子・地膚子で祛風邪を行い、生地黄・赤芍・

連翹にて清血熱を行う。十味風疹湯と名づける。3～4剤で効果がみられる」



ジベルばら色粧糠疹〔風熱瘡〕 pityriasis rosea Gibert

病名解説

風熱瘡の病名は『外科啓玄』に由来する。該書では病因について「肺が風熱を受けると、皮毛の間にこの症〔病証〕が生じる」と述べている。臨床症状については「始めは疙瘡〔ブツブツ・おでき〕ができ、痒くて忍びがたく、これを搔くと瘡を生じる。疥に似ているが実は疥ではない」としている。本病はまず大きな母斑が出現すると、次いでやや大きな子斑ができ、粧糠状鱗屑で覆われることから、俗に母子癬とも称される。現代医学におけるジベルばら色粧糠疹に類似している。

現代医学の概念

主に体幹、また四肢・頭部・顔面にも生じる原因不明の炎症性角化症で、1～2カ月で自然治癒する。原発疹として、大型の鱗屑性の病変（herald patch）が1個出現し、数日して体幹や四肢近位に鱗屑を伴う爪甲大、卵円形の紅斑が多発性に生じる。その長軸を皮膚割線方向に一致させる特徴があり、クリスマスツリー様の紋様になる場合もある。軽度の癢痒を伴う。青壮年に生じて、春秋にみられる。

病因病機

血熱伏在に加えて、再三にわたり外表に風邪を感受し、あるいは風熱を感受することによって生じる。

1. 風熱外束

風熱の邪を受けたり、汗が出たとき風に当た

ると、外邪が肌膚に蘊鬱して腠理を塞ぐ。長期にわたって発散できないでいると、それが鬱滞して熱と化す。熱が陰血を消耗すると、皮膚は濡潤作用を失う。『諸病源候論』では「風熱の気は、まず皮毛より肺に入る。肺は五臓の上蓋であり、全身の皮毛にその兆候を生ずる。皮膚腠理が虚しているとき風熱の気はまず皮毛を傷つける」としている。

2. 風熱内蘊

辛馨炙燂・甘肥辛辣の食品の過食や情緒煩燥・五志化火によって血熱内蘊となっており、さらに風邪外襲を感受すると、風熱相搏の状態となり発病する。

3. 陰虚血燥

肺陰不足のため気化無力となると津液が皮膚腠理めくを行ることができない。そのため陰火内熾・脾湿肺燥となる。皮膚が濡養作用を欠くと潤いを失うため痒みや鱗屑が生じる。

このように本病は血熱内蘊の状態で、風熱を感受することによって、内外の邪が合わさり、肌膚に鬱滞した邪が腠理を塞ぐことによって発病する。旺盛となった熱が脈絡に充満すると紅斑が現れる。風邪燥血となると肌膚は栄養を失うため鱗屑が生じる。風邪が皮膚腠理を往来するため癢痒を感じる。